

前ノ原第2遺跡・ズクノ山第2遺跡E地区

県営畑地帯総合整備事業（緊急整備型）
鹿村野地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書

1999

宮崎県宮崎郡田野町教育委員会

例　　言

1. 本書は、平成9年度から現在も実施中の県営畠地帯総合整備事業（緊急整備型）鹿村野地区に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、平成10年度に実施した前ノ原第2遺跡とズクノ山第2遺跡E地区における調査結果の概要を報告するものである。

2. 本遺跡の現地調査及び室内調査は、宮崎県中部農林振興局からの受託事業と文化庁の国庫補助事業を得て田野町教育委員会が実施した。調査体制は下記のとおりである。

調査主体 宮崎県宮崎郡田野町教育委員会

調査組織 田野町教育委員会 教育長　　堀内 侃

社会教育課長　　永谷 弘

社会教育課長補佐

兼係長 川口 博文

埋蔵文化財担当　　同主任　　森田 浩史

同主任　　金丸 武司

調査及び調査事務担当　　同主任　　森田 浩史【前ノ原第2遺跡】

同主任　　金丸 武司【ズクノ山第2遺跡】

3. 調査の一貫として実施した¹⁴C年代測定、リン・カルシウム分析等の自然科学分析については古環境研究所に委託した。

4. 現地の作業員として、田野町内をはじめ清武町や宮崎市からも多数の参加をいただいた。

5. 室内調査の実施にあたり、下記の方々の補助を得た。

6. 本書は第Ⅱ章第1・2節を森田が、他を金丸が執筆した。総集は金丸が行った。

7. 本書で用いた方位は磁北、標高は海拔絶対高である。

8. 本書の色調表示は、農林省農林水産技術会事務局監修の「標準土色帳」を参考にした。

9. 本書における遺構の表示には、下記の記号を用いた。

集石遺構 (S I)　　土坑 (S C)　　ピット (S P)　　配石遺構 (S X)

10. 出土遺物は田野町教育委員会文化財調査事務局及び文化財収蔵庫に保管している。

本文目次

第Ⅰ章 序説	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の立地と歴史的環境	1
第Ⅱ章 前ノ原第2遺跡の調査	3
第1節 調査の概要	3
第2節 検出遺構	5
第3節 出土遺物	6
第Ⅲ章 ズクノ山第2遺跡E地区の調査	8
第1節 調査の概要	8
第2節 検出遺構	10
第3節 出土遺物	11

図版目次

第1図 町内主要遺跡分布図（北部）	2
第2図 調査区位置図	2
第3図 前ノ原第2遺跡土層柱状図	3
第4図 前ノ原第2遺跡遺構分布図	4
第5図 前ノ原第2遺跡検出遺構実測図	5
第6図 前ノ原第2遺跡出土遺物実測図	7
第7図 ズクノ山第2遺跡E地区土層柱状図	8
第8図 ズクノ山第2遺跡E地区遺構分布図	9
第9図 ズクノ山第2遺跡E地区検出遺構実測図	10
第10図 ズクノ山第2遺跡E地区出土土器実測図	12
第11図 ズクノ山第2遺跡E地区出土石器実測図	13

写真目次

図版1 前ノ原第2遺跡・ズクノ山第2遺跡調査着手前空撮	15
図版2 前ノ原第2遺跡集石遺構検出状況	16
図版3 前ノ原第2遺跡集石遺構検出状況（SI-10～12）（SI-02）	17
図版4 前ノ原第2遺跡集石遺構検出状況（SI-01）（SI-06）	18
図版5 前ノ原第2遺跡集石遺構完掘状況	19
図版6 前ノ原第2遺跡出土遺物（縄文時代早期の土器）	20
図版7 前ノ原第2遺跡出土遺物（縄文時代早期・後期、平安時代の土器）	21
図版8 前ノ原第2遺跡出土遺物（縄文時代早期の石器）	22

図版9	ズクノ山第2遺跡調査着手前空撮	23
図版10	ズクノ山第2遺跡集石遺構・土坑検査出状況(SC-01~06)	24
図版11	ズクノ山第2遺跡配石遺構検出状況(SX-1)	25
図版12	ズクノ山第2遺跡配石遺構検出状況(SX-2)(SX-4)	26
図版13	ズクノ山第2遺跡集石遺構検出状況(SI-46)(SI-04)	27
図版14	ズクノ山第2遺跡集石遺構検出状況(SI-61)(SI-38)	28
図版15	ズクノ山第2遺跡出土遺物(縄文時代早期の土器)	29
図版16	ズクノ山第2遺跡出土遺物(縄文時代早期の土器)	30
図版17	ズクノ山第2遺跡出土遺物(縄文時代早期の土器)	31
図版18	ズクノ山第2遺跡出土遺物(縄文時代早期の石器)	32

第1章 序 説

第1節 調査に至る経緯

田野町は宮崎市の西方約20kmの地点を中心とする田野盆地と、周囲を取り囲む鰐塚山系をはじめとする山地及びその麓に形成された扇状地や河岸段丘などからなり、1市（宮崎市）5町（清武町、高岡町、山之口町、三股町、北郷町）と接している。これまで大根や葉煙草などの農業を主産業としていたが、近年は工業団地の整備や専門学校の誘致、宅地開発などにより、次第に変化・発展しつつある。その一方で農業基盤整備事業や各種の開発事業に伴う埋蔵文化財の保存が大きな問題となっており、町教育委員会でも調整や調査体制の整備・充実を図ってきた。しかし、これらを含めた開発事業との調整は困難を極め、遺跡の大部分は記録保存の対象となり消滅しているのが現状である。

平成10年度は県當畠地帯総合整備事業鹿村野地区が実施されることとなり、事業地内に県文化課が分布範囲を確認するため試掘調査を行なったところ、部分的に縄文時代早期の遺構・遺物が分布することが明らかになった。平成10年5月7日に中部農林振興局、県文化課、町農業整備課、町教育委員会の四者で協議し、設計施工上やむを得ず消滅を免れない部分について発掘調査による記録保存を実施することとなり、平成10年8月10日付けで委託契約を締結、同年8月11日から現地の調査に着手した。調査は、田野町をはじめ近隣の市町村の皆様の御協力を得ながら同年12月21日に終了した。両遺跡の調査面積は、計約17,700m²に至った。

第2節 遺跡の位置と歴史的環境

鹿村野地区は田野町の中心部から北北東へ約5km、宮崎市との町境に流れる黒北川と、清武町との町境を流れる清武川に挟まれ半孤立化した標高約100~110mの台地である。現地表面からは起伏がそれほどなく平坦な地形のように感じられるが、開墾前は開拓谷と丘陵の混在した複雑な地形であったことが表土除去作業の段階で明らかになった。

周辺には前年度調査が行なわれたズクノ山A~C地区があり、アカホヤ火山灰層の上面と縄文時代早期の文化層において生活址が確認された。今年度はD地区で調査が行なわれ、縄文時代早期の土坑や遺物が出土している。前ノ原第2遺跡の隣接地からは、縄文時代前期と推定される玦状耳飾りも採集されている。この近隣には清武川左岸に沿って周知の遺跡が多数あり、中でも灰ヶ野第1・第2遺跡はじめ多数の遺跡が所在する。近年この一帯では清武町及び宮崎県による大規模な発掘調査が実施され、各時代研究に欠くことのできない貴重な成果が得られている。

【参考文献】

- 「田野町内遺跡詳細分布調査」田野町文化財調査報告書第10集 田野町教育委員会 1990
「椎屋形第1遺跡・椎屋形第2遺跡・上の原遺跡」県営農地保全整備事業時屋地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 宮崎市教育委員会 1996 ほか



第1図 町内主要遺跡分布図（北部）



第2図 調査区位置図

第Ⅱ章 前ノ原第2遺跡の調査

第1節 調査の概要

遺跡は鹿村野地区台地上の南側に位置し、県道花見田野線の東側を調査した。調査前の地形は南西から北東方向に緩やかな傾斜を呈する畠地であったが、耕作土を除去した段階でその南側はシラス層が露出しており、開墾の影響をかなり受けていることを確認したほか部分的に天地返しをおこなった部分も見られた。また、西側中央から比較的深い谷地形も確認した。詳細な調査は耕作土除去後に確認した文化層の消滅部分を除外して、約7,700m²を対象に実施した。

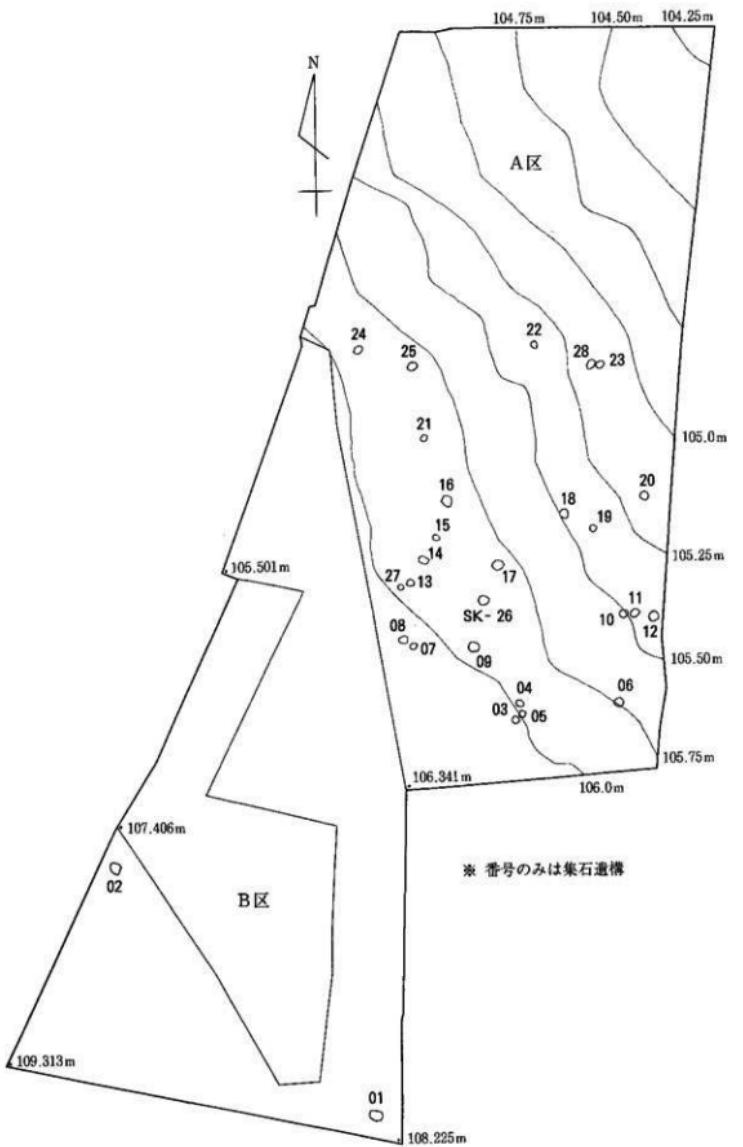
調査区内の基本層位は、上層から耕作土層、赤ホヤ火山灰堆積層、暗褐色硬質土層（通称カシワバン）、褐色土層1、褐色土層2、褐色硬質土層（小林軽石混入）となるが、一部で赤ホヤ火山灰堆積層の上層において赤ホヤ火山灰二次堆積（または腐食土）層や黒色土層も確認した。以下、文中では基本土層柱状図に従って記述する。

本遺跡の調査にあたっては、前段階で実施された試掘調査のデータに基づいて縄文時代早期の遺構・遺物が出土することを想定したほか、県道を挟んだ西側において块状耳飾りが採集されていることから、縄文時代前期の集落跡の検出も念頭に置いたが、遺構・遺物ともに確認できなかった。おそらくこの時期の文化層は既に消滅したものと推定される。

調査はまず第2層直上まで機械掘削をおこない、遺構の有無を確認しながら更に第3層まで掘削したのち、手掘りによる遺物包含層の精査ならびに遺構検出作業を進めた。第3層直上においては焼跡が数点見られる程度であったが、同層掘り下げの段階で徐々にその量も増し土器や石器が出土しはじめ、第4層直上に至った段階で集石遺構を検出した。また、第4層掘り下げの段階でも集石遺構や遺物が出土したことから、縄文時代早期でもある程度の時期差をもって集落が営まれていたものと推察される。出土した遺物は大きく分類して、早期前半の前平式系土器と、同後半の平底式土器を主体とする。各集石遺構の時期差を含めた本遺跡における位置づけについては、各遺物の分布状況や各遺構内覆土の詳細な検討をおこなっていない段階であるため、今後の室内調査ならびに報告書作成作業の中で明確にしていきたい。その他、風倒木や耕作土内から縄文時代後期の土器と古代の製塩土器（いわゆる布痕土器）を含めた土器も出土しており、後者は当時の官道などを考察するうえで、貴重な資料となるであろう。

第1層	耕作土
第2層	赤ホヤ火山灰堆積
第3層	(10YR4/4) 褐色土 白色バミス含有
第4層	(10YR4/6) 褐色土 白色バミス含有
第5層	(10YR5/6) 黄褐色土 小林軽石含有

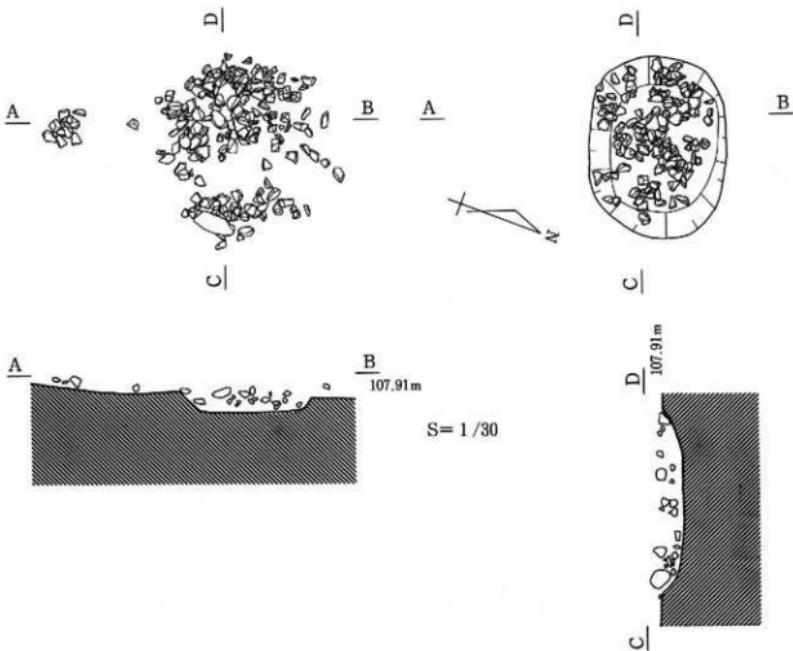
第3図 基本土層柱状図



第4図 前ノ原遺跡遺構分布図

第2節 検出遺構

縄文時代早期の集石遺構を27基と時期不明のピット、土坑などを検出した。集石遺構はB区の2基を除いて、A区の中央から南側にかけて集中している。中には明確なまとまりが見られるものもあった。例えば(SI-03~05)(SI-11~12)(SI13~16)(SI17・19・26)などである。使用と廃棄の繰り返しによる結果か、または同時に使用されたものであるかは今後詳細な検討作業を要するが、ある程度のグルーピングと新旧関係の推定が可能となるであろう。おそらく大きく分けて早期の前平式段階と平格式段階のものと考えられる。集石遺構の形状等については近年様々な分類がなされているが、ここで検出したものは全て土坑を伴うタイプである。また、集石遺構内の礫は大半が受熱により赤変しており、明確な焼土を伴わないことも特徴としてあげられる。その他、同時期の居住域の存在を示すデータは得られなかった。ピットと土坑については、覆土内に赤ホヤまたは二次的赤ホヤ(腐食土)が混入しており、同火山灰堆積以降のものと判断できる。いずれも廃棄の時期を推定しうる出土遺物は無い。



第5図 前ノ原第2遺跡検出遺構実測図 (SK-02)

第3節 出土遺物（第6図）

遺物は、すべて重機による表土掘削後の掘り下げ精査作業の段階で出土したものである。大半は縄文時代早期のもので、他は縄文時代後期の土器と平安時代の布痕土器がA区の西側谷部との境で出土したのみである。調査区北側及び南側谷部は遺物の分布が疎らであった。

(1) は貝殻による押引文を口縁部に施したものである。2列の貝殻腹縁刺突を口縁部と胴部の境界に行うことにより、文様帯を区画している。内面は横位の条痕の後に丁寧にナデ消されている。胎土には砂粒及び白色粒子が目立つ。口唇部の残存が悪く断定はできないが、前平系もしくはその前後の段階のものと考えられる。

(2) は口縁部に2列の刺突を行い、胴部以下に粗い条痕文を残すものである。口唇部は内面に傾斜し、内面との間に棱を形成しない。町内の早期前半に多い前平式土器の一タイプであろうが、口唇部にも刺突を行なう点が異なる。

(3) は円筒状の器形を呈す、外面に横方向の貝殻条線文の施文された土器である。これは縄文早期前半の中九州において出土量の多い中原式土器と考えられ、木崎康弘氏の編年によればIV式にあたる。町内ではこれまで多くの遺跡から出土が確認されているが、他の例に漏れず、この土器も灰褐色気味であり、外面には煤の付着が目立つ。

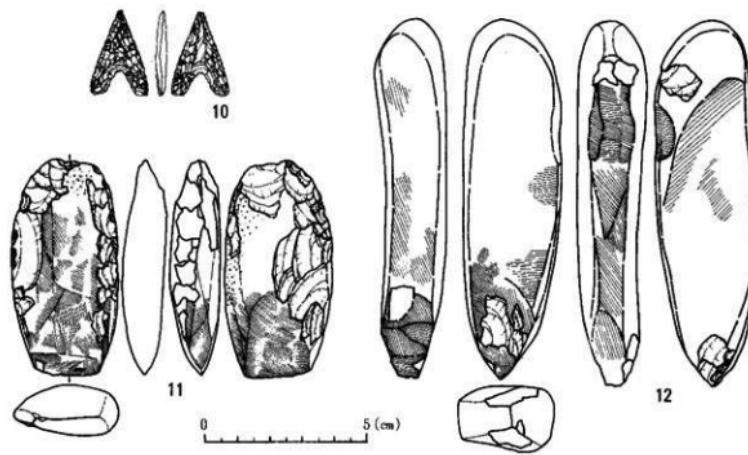
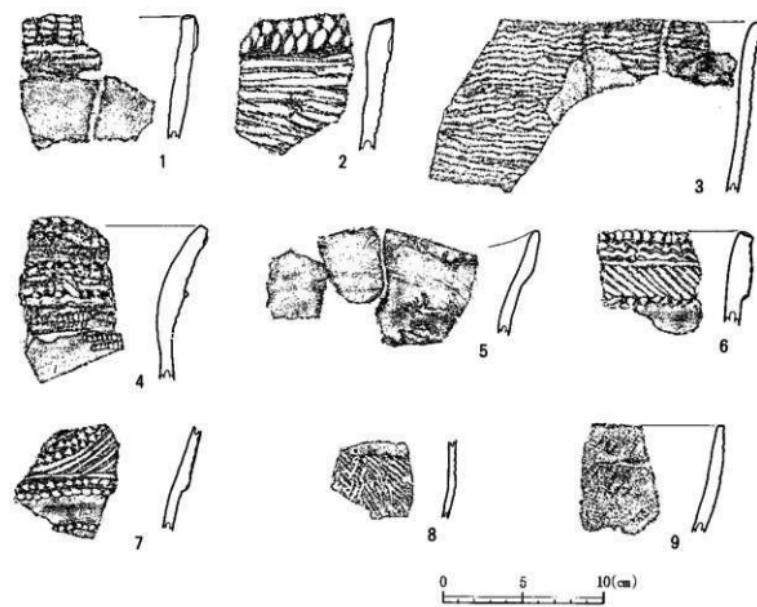
(4～8) は縄文早期後半の平柄式である。(4) は平口縁であり、口縁部に広い間隔で細い三条の刻目突帯を設けたのち、突帯間に浅く縄文を施文する。また、口唇部上面にも貝殻腹縁刺突が残されている。(5) は器面を丁寧なナデで調整されており、沈線や刺突・条痕などは施文されない。口縁は4単位の波状になるとされる。(6) は沈線による文様が明晰に残る。口縁部の肥厚帯は段状にはっきりと区分される。(7) も(6) と同様の沈線で施文されるが、沈線の交錯部の処理が粗雑であり、沈線の間隔も一定ではない。(8) は結節縄文の施文された胴部である。径が小さく、小型の土器であったことが窺える。(4～8) の胎土には全て、金色に変色した雲母片が多く混入している。

(9) は外面に縄文が浅く残された口縁部片である。内面には横方向のナデが丁寧に施される。外面には煤が付着する。出土層位から、これも縄文早期のものと考えられる。

(10) は、緻密な調整を行なった石鎚である。裏面中央の剥離面は素材時のものと考えられる。剥離面の切り合いより、抉り部と側縁の調整は表裏両面で異なる順序によって製作されたことが認められる。尖端部はわずかに欠損している。暗茶褐色のチャート製。

(11) は石斧である。厚手の剥片を素材とし、粗い剥離により大まかな成形を行なった後に磨きにより平坦部と刃部を仕上げたものである。末端部及び側縁には、敲打による調整痕も認められる。刃部正面はほぼ直線である。石材は、器面に綫状の筋が残るところから、硬質頁岩と思われる。

(12) は棒状の頁岩の礫を用いたものである。断面が膨らみをもつ縱長の台形になるよう、全面を研磨し仕上げている。柄部には通常の石斧において一般的な縁辺からの剥離痕や敲打痕ではなく、そのような工程を経ず製作されたことが窺える。刃部には剥離と研磨の双方が用いられているが、刃部幅が著しく狭いため、通常の石斧とは正面観が大きく異なる。また、側縁部に研磨による凹み部が設けられているが、これは柄に装着した際の滑り止め（ストッパー）と考えられる。縦斧または鉤としての用途が推測される。



第6図 前ノ原第2遺跡出土石器実測図

第Ⅲ章 ズクノ山第2遺跡E地区の調査

第1節 調査の概要

遺跡は鹿村野地区台地上の北東縁辺部、県道花見川野線の東側にあたる。当地は北と東に河川の浸食による急傾斜があるほか、南側には緩やかな開析谷が伸びるために周辺の台地とは地形的に半ば遮断された様な格好である。

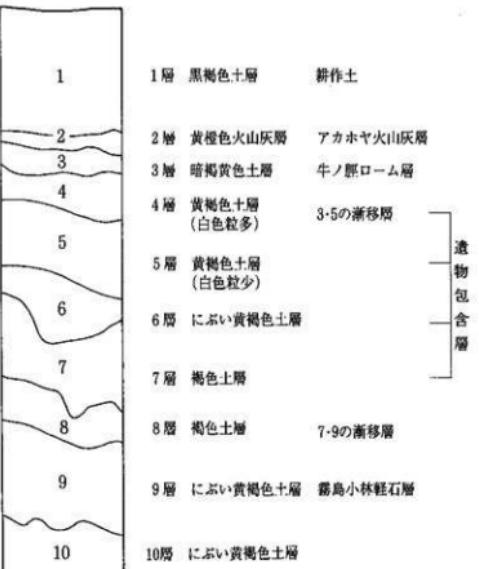
調査は先ず重機による表土剥ぎ取り作業から行った。表面採集時に弥生時代の石器なども確認されではいたが、耕作により2層のアカホヤ火山灰層上面までは搅乱されていたため、3層上面まで下げたところ、表土の堆積が調査区東側では30cm前後であるのに対し、西側では1m前後と厚く、地表面での高低差が逆転していることが判明した。また地表からは判別できなかったが、調査区の中央から南北に緩やかな落ち込みが走っていることが確認された。この落ち込みの東西を調査したところ、西側については遺物等の分布が希薄であった一方で、東側では2層を除去した時点で既に遺物が確認できたばかりでなく、その下層からも多量の遺物の出土が確認できた。こうした状況を考慮して、当遺跡の分布の中心を東側と判断し、集中的に調査を行った。

その結果、この部分は丘陵部と緩やかな谷が混在する複雑な立地条件にあることが判明した。また、このなかにも、調査区を南北に区切る恰好の落ち込みが確認されたが、この落ち込みの南北で出土遺物の内容に明確な相違は認められない。

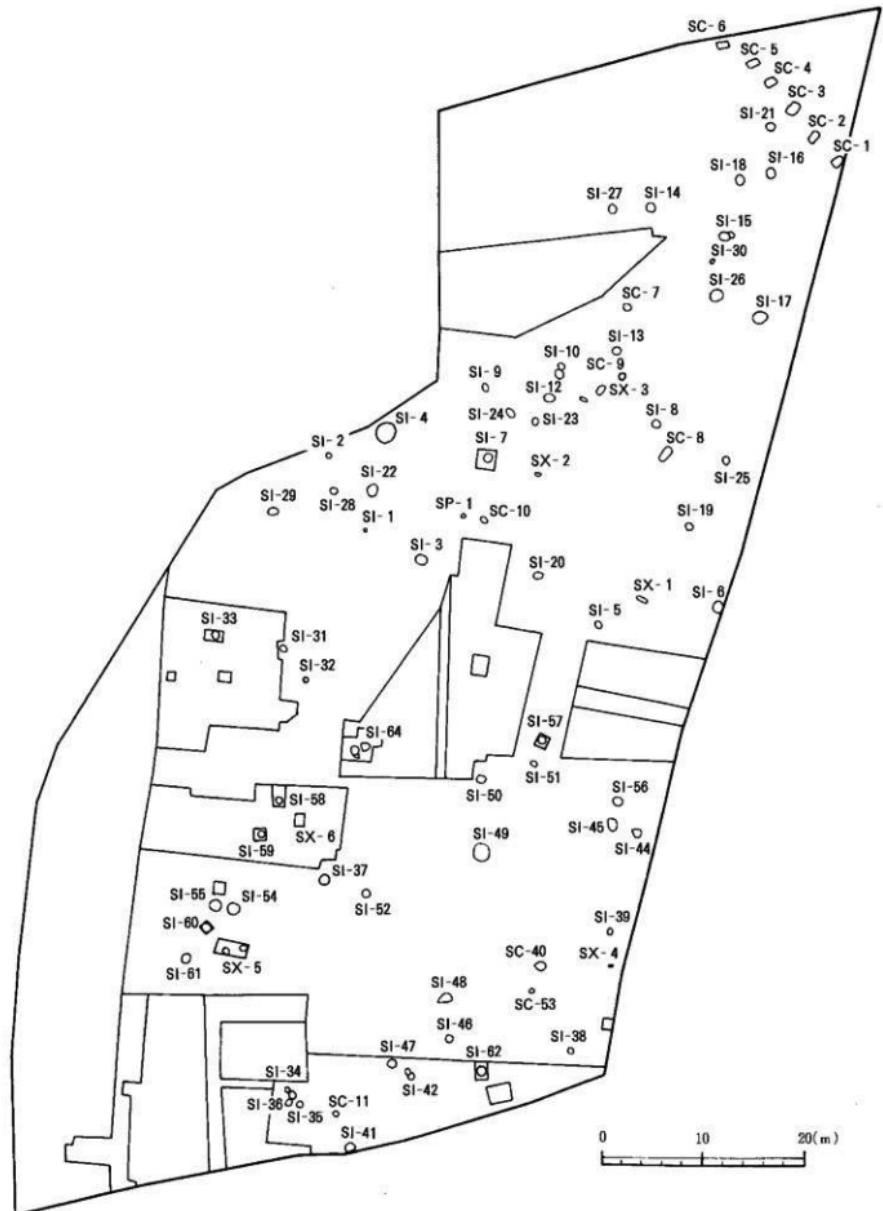
遺物包含層は4層から7層まで広がる。出土した土器はその殆どが口縁部に貝殻腹縁刺突を持つ条痕文土器で、他に辻タイプ、下剥峰式土器、中原式土器、横位・繩粒の楕円押型文土器少量出土することから、縄文早期前半を主体としていることが考られる。なかには早期後半の平格式も出土しているが、ごく少量のみに留まる。なお、地形が複雑であったこともあり、それぞれの土器群を層位的に確認することはできなかった。

石器は霧島及びその周辺を原産地にもつ黒鐘石の小礫及び剥片が多量に出土している。また、その石材を用いて制作された狩猟具である石器や木材加工工具及び伐採具である磨製石斧、植物質食料加工工具の磨石の占める割合が大きい反面、石匙やスクレイバーなどのいわゆる解体具の出土量が極めて少なかった事も特徴の一つに挙げられる。

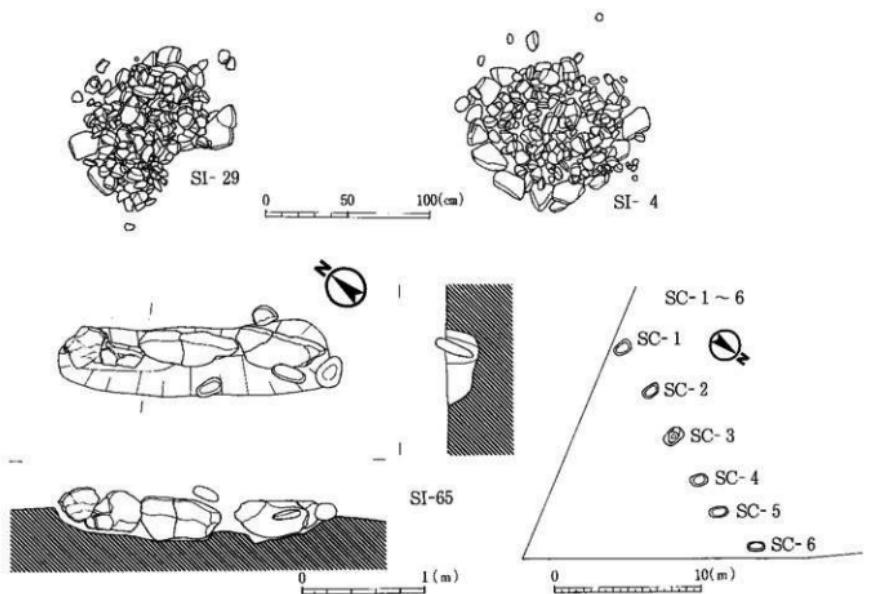
また、硬質頁岩製とみられる磨製異形石製品も数点出土しており、当時の祭祀行為・精神文化を研究する上で、興味深い資料といえるであろう。



第7図 基本土層柱状図



第8図 ズクノ山第2遺跡E地区遺構分布図



第9図 ズクノ山第2遺跡E地区検出構造実測図

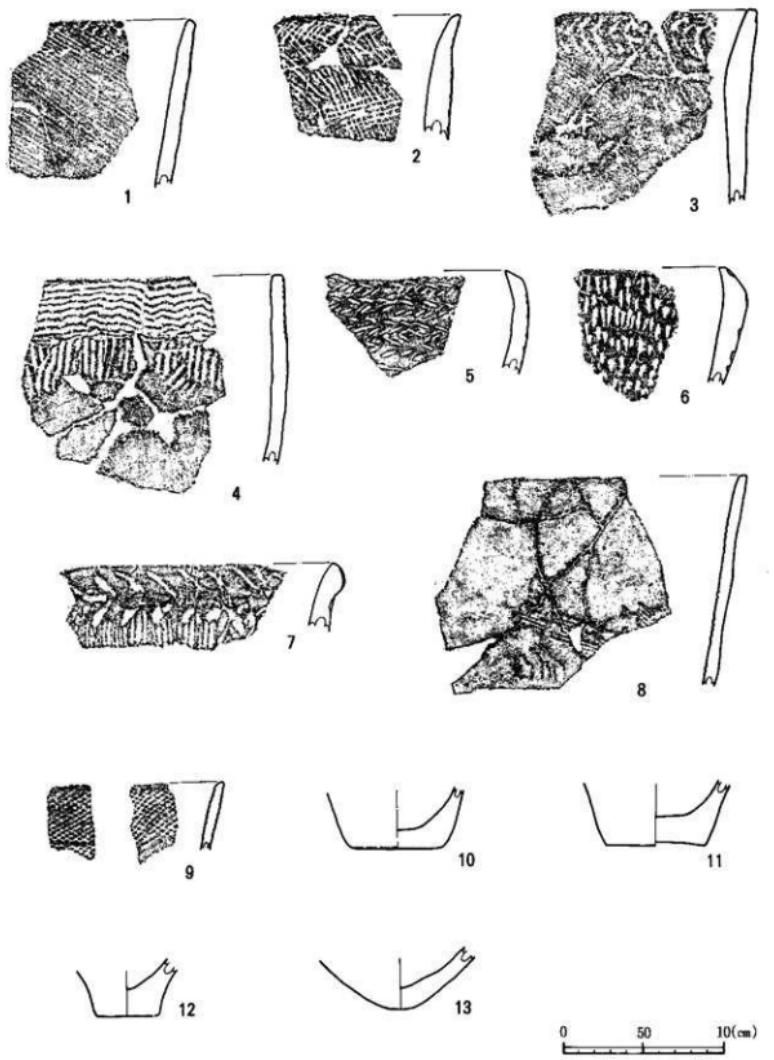
第2節 検出構造

遺構は東側調査区のほぼ全面で検出された。遺構は集石遺構64基、配石遺構6基、土坑11基、ピット1基である。集石遺構のうち、調査区を分断する緩い谷の北側には33基、南側には31基確認された。このなかで7基は、集石下位の土坑を構築したのち、土坑の縁辺に板石状になる大形の凝灰岩を敷設し、その中央に小礫を入れたものである。ちなみに、周囲に配置される板石は、調査区北側の崖面の露頭より採取されたものと思われる。他に、集石遺構に近接して石皿を設けたものや、浅い土坑に角礫を入れたもの、地下に掘り込みを持たないものなど、さまざまなバリエーションが確認された。配石遺構のうち3基は、生活面に長円形の浅い土坑を掘り、そこに扁平な礫を1~4個配列している。複数の礫を配置するものは全て斜方向に傾いた形で検出された。断面は二層に分かれており、礫を固定させるため2段階に分けて構築した意図が窺える。また、1個の石が設置されたものは、生活面に垂直に立てられた形で検出され、これも2層に分けて構築されていた。これらの遺構の用途は全く不明であるが、焼土が周辺から確認されていないため、火に関係したものとは考えにくいことや、周辺に磨石が多いこと、配置された石の一部に研磨痕が認められるという傾向がある。土坑のうち6基は、調査区北端に列状に並んで検出された。深さはどれも60cm前後であり、陷穴である可能性は低い。また覆土中にはアカホヤ火山灰のブロックも混入された。時期的には縄文時代早期でも終末期と考えられ、遺跡が主に形成された縄文時代早期前半とは年代的に隔たりがある。

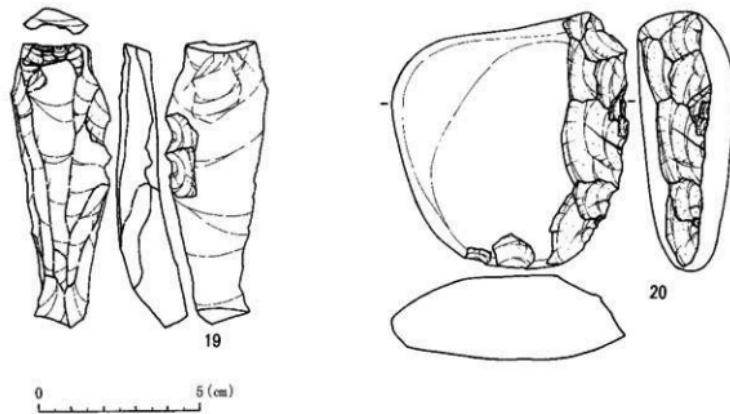
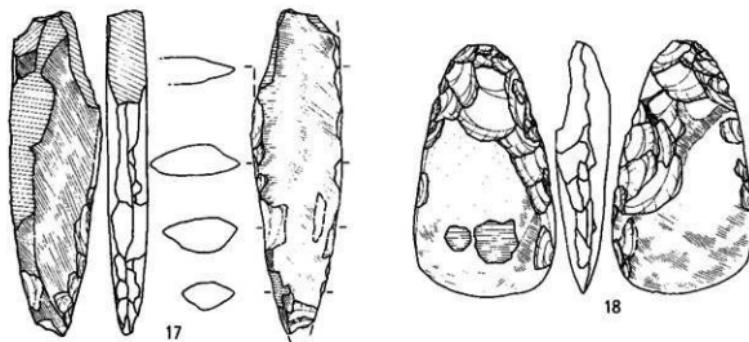
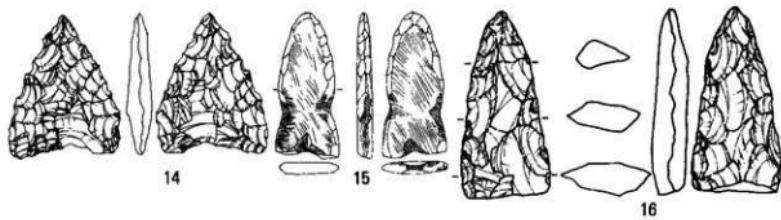
第3節 出土遺物（図10・11）

(1～3)は口縁部直下に貝殻腹縁刺突をもつ条痕文土器である。(1)は、斜方向の条痕を外面全面に施したのち、貝殻腹縁刺突を2列にわたって巡らしたものである。内面は丁寧な横方向のナデ調整若しくは横～斜方向のケズリが行なわれている。当遺跡から出土した土器の大部分を占めるが、口縁部の断面はバリエーションに富む。(2)も同じ刺突文を口縁部にもつが、胴部の条痕文の方向が分かれしており、粗雑である。(3)は条痕文が浅く施文され、貝殻腹縁刺突を羽状に施す。この類例の土器は、総じて焼成が粗悪である。(4)は貝殻腹縁による条線が施文されている。外面胴部の残存状況が悪く観察が定かでないものの、文様帶は胴部以下は無文のようである。内面はケズリによる調整が認められる。縄文早期前半の中九州において出土量の多い中原式と考えられ、木崎康弘氏の編年に従えば、IV式にあたる。(5・6)は県下で出土例の多い土器であり、近年桑畠光博氏によつて辻タイプと命名された一群である。(5)は口縁部でキャリバー状に内湾し、外面に羽状の短沈線文が横位に施文される。(6)の外面には縦位の短沈線が無数に施文される。(7)は口縁部に肥厚帯をもつ土器である。肥厚帯の断面はカマボコ形であり、その上を貝殻腹縁による斜位の刺突を行なう。肥厚帯の下部にも斜位の刺突が巡らされるが、原体は小形の巻貝のようである。これらの文様の下位には縦方向の条痕が施文される。(8)は無文土器である。器壁が薄く、外面はナデにより丁寧に仕上げられる。内面は二枚貝による横方向の条痕を入念に施し、器面を軽く撫でている。(9)は横位の楕円押型文が表裏両面に施文している。楕円は細粒で、外面には二列目との間に僅かに無文帯が形成される。内面には原体条痕は認められない。器壁は薄く、縄文早期前半に東九州で卓越する押型文土器のなかでも、かなり初期のものと考えられる。(10～13)は底部である。(10)は底面まで磨きの施されたものである。底部付近の外面は縦方向のケズリによる調整を行う。(11)は外面のケズリが更に顕著なものであり、底面も同様の調整を行うが、この土器の底部は上げ底氣味である。(10・11)の内面はどちらも丁寧な磨きであるが、(12)は外面と同様に内面にもケズリが施されている。底面は残存が悪く細かな観察は不可能である。底径は小さく、一見すると弥生土器に酷似する。(13)は丸底の底部である。内外面ともナデによる調整が行われる。出土層位よりこれも早期のものと思われる。

(14)は大形の石鎚である。面的な調整を行なうことによりやや抉りをもつ二等辺三角形状に仕上げており、この時期に卓越するいわゆる尖頭状石器とは全く性質の異なるものと考えられる。ホルンフェルス製。(15)は板状の剥片の縁辺部を剥離を行なった後、磨きによって成形しているが、尖端部は銳利ではない。磨きが両縁と下縁部にくびれが生じるように行われ、そのため擦痕が顕著に認められる。頁岩製。(16)は縄文早期の遺跡に出土する石臼である。剥離による成形後全面を磨いており、そのため稜線の観察は明確ではない。石材は安山岩質を用いている。安山岩製。(17・18)は石斧である。(17)は頁岩製であり、剥離工程を縁辺部のみに留め、磨きによる作業を全面に行なって作られる。(18)は縦面除去の縦長剥片を素材として用いている。ホルンフェルス製。(19)は縦長剥片である。表面の観察より、連続的な縦長剥片剥離作業により作出されたことが窺える。表面上部と、裏面左側部の剥離痕以外は全面に顕著に磨かれているが、その意図は不明である。流紋岩製。(20)は砂岩の縁部に粗い剥離を行なった礫器である。当遺跡では、この礫器が5点近く出土した。



第10図 ズクノ山第2遺跡E地区出土土器実測図



0 5 (cm)

第11図 ズクノ山第2遺跡E地区出土石器実測図



前ノ原第2遺跡・ズクノ山第2遺跡調査着手前空撮写真（南から）





集石遺構検出状況（南から）



集石遺構検出状況（西から）



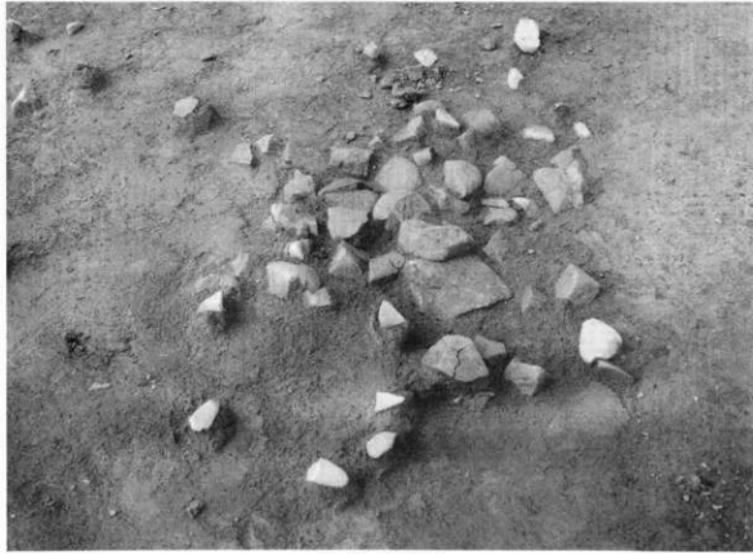
SI-10~12 (西から)



SI-02 (南から)



SI-01 (南から)



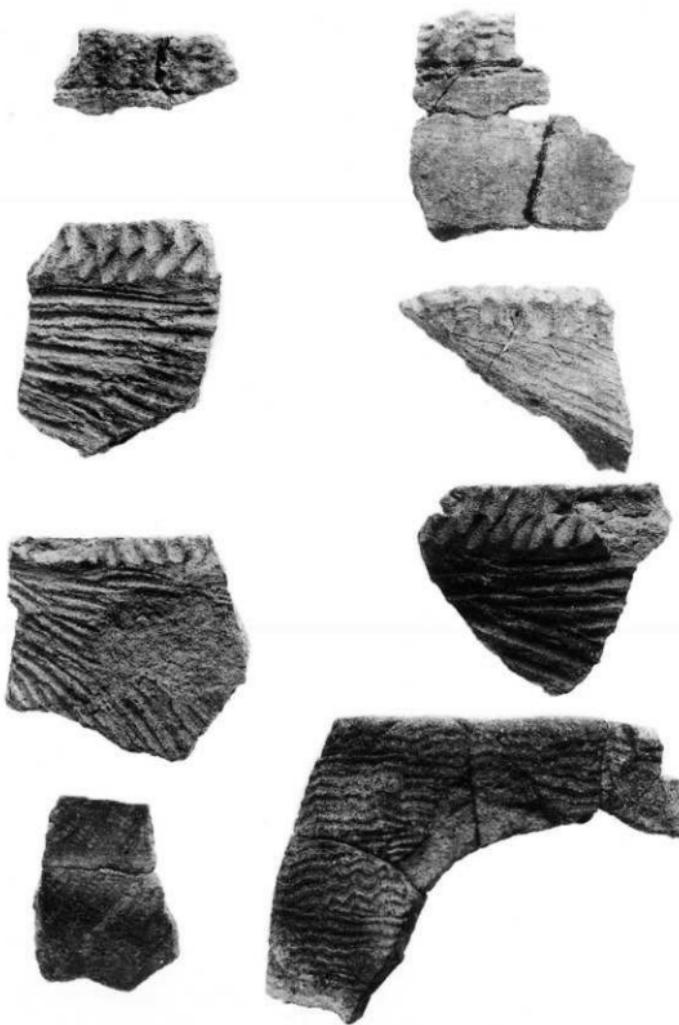
SI-06 (南から)



集石造構完掘状況（南から）



集石造構完掘状況（西から）



前ノ原第2遺跡出土遺物（縄文時代早期の土器）



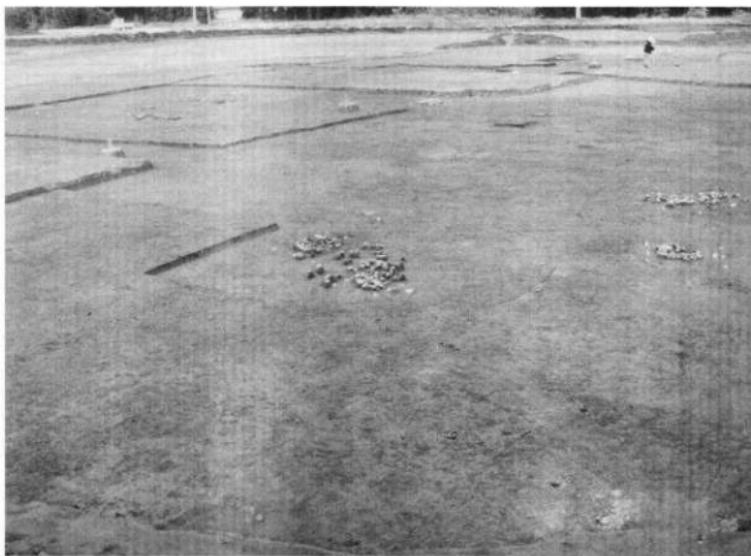
前ノ原第2遺跡出土遺物（縄文時代早期・後期、平安時代の土器）



前ノ原第2遺跡出土遺物（縄文時代早期の石器）



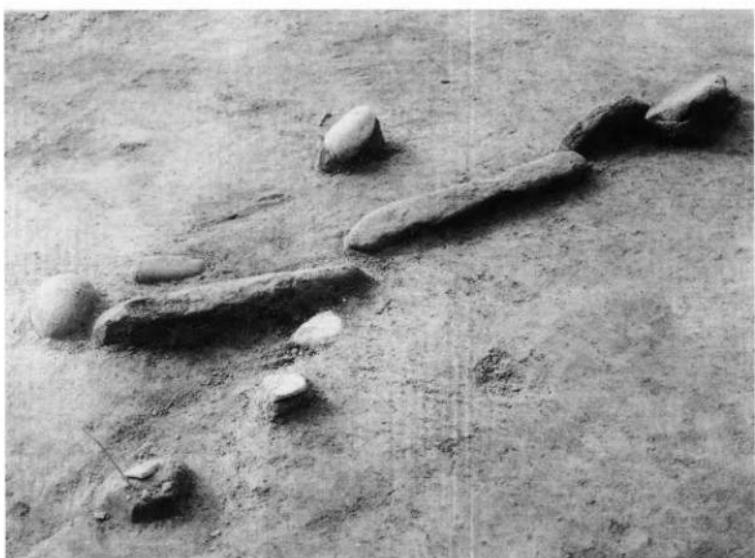
スクノ山第2遺跡調査着手前空撮（南東から）



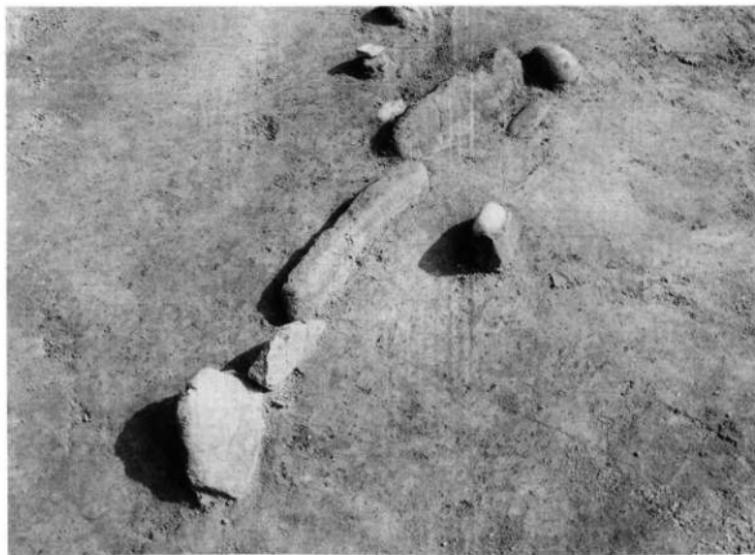
集石遺構検出状況（東から）



土坑検出状況（北西から）



SX-1 (北から)



SX-1 (西から)